

はんざけの棲むムラ

野坂喜美



1992.5-28
NARIBAKI

著者略歴

野坂喜美^{のざかきよし}（本名） 農業。

1928年6月鳥取県名和町生れ。

1959年「いねの花」第三回地上文学賞。

1991年「あら、エッサッサ」NHK中・四国
ラジオドラマ脚本コンクール優秀作品。

1993年「アル中達のブルース」 改題「牛の目
ン玉」NHK広島局テレビドラマ化

麓人会員

第Ⅱ期 米子文学同人

現住所 西伯郡名和町古御堂191

はんざけの棲むムラ

1995年6月17日 第1刷 定価1,500円

著 者 野坂喜美

発 行 米子今井書店
鳥取県米子市尾高町68
電話 0859-22-5158

印 刷 米子今井書店印刷工場

製 本 日宝綜合製本株式会社

はんだげの棲むムラ

野坂喜美

は
ん
ざ
け
の
棲
む
ム
ラ
／
目
次

しづきが雨戸を叩く町 9

はんざけの棲むムラ 41

アル中達のブルース 89

西風の落ちる時刻^{とき} 137

帰心 165

磧の鳴る音 193

夕焼け空は家出色

207

コメは、ああかや

229

軍馬道ぐんばみち

269

センキヨあそび

307

あとがき

はんざけの棲むムラ

しづきが雨戸を叩く町

真吉は海が好きだった。

陸よりも海が好きだった。暇さえあれば海に潜った。息をつめて眺め渡す海底には無限の世界が展げ、こみ上げて来る歓喜があり、静謐な安堵がたゆとうていた。家でテレビを観たりパチンコに行ったりするより海の底に潜っているときの方が幸せだった。腹が立ったり、悲しみに打ちひしがれたときにも、海に潜ると、直ぐ治った。

八ミリのウェット・スーツを着ていれば冬でも寒くなかった。仕事するときには、腰に十センチの鉛を巻き、両足には黒い足ビレを付けた。

真吉は六つや七つは平気であった。ときには、十二も十五も潜ることもあった。十五も潜る者は真吉の他には誰もいなかった。

一つというのは一尋のことだった。一尋は大体身長と同じであるから、十五というのは身長十五倍ということである。腰に鉛を巻きつけるのは軀が浮き上らないためのものがあった。鉛の重量は体格とか体力を考えて自分で調整した。どちらかといえは小柄な真吉

は、十キロからせいぜい十二キロどまりが適當と思えたが、大柄の連中に負けないものを身に付けていた。足ビレは、勿論水中で素早く動くためのものである。素早く動くのは海底に少しでも長時間滞在したいからである。

真吉は息をつめ、長くなると、潜る前に力一杯吸い込んでおいた胸の空気を少しずつ泡にして吐きながら、水中眼鏡の奥から小さな眼を光らせて獲物を探した。

冬場はサザエも悪くなかったが、赤ナマコはキロ当り三千円にもなった。三年前の十七歳のとき、二時間足らずで、十万円も稼いだときのことだ。真吉の頭にこびりついて離れない。あの時は赤ナマコの大群で海の底が一面、黄金色に輝いていた。薄暗い海底に、本当に電灯でも点いたように明るく光り輝いていた。あまりの壮観に若い真吉の全身に一瞬激しい戦慄が走った。次の瞬間には痛い程に鳥肌が起った。あの時の光景は忘れられない。多分、一生忘れることはないだろう。父親が死んだ高校三年の冬である。真吉はナマコの大群を発見した翌日から登校していない。学問は好きではなかったし、とりあえず、母が父の墓を建てたがっているのを手伝ってやりたかった。以来、近所の大人達と交って、海に潜ったりパチンコに行ったり、酒を飲んだり土方に出たりするようになっていた。三年も経つと、真吉は海底の地形については陸上の地理より詳しく判るようになっていた。例えば少し離れた場所に在る友人の家への道順は思い出せなくても、海底の深淺凹凸、沖の岩場に瀬の拡がり具合、カキの附着する岩、サザエの棲家、鯛の巣、もずく畑、夏になる

と赤エイが子を産みに来る砂場等々掌を指すように憶え切っている。

が、真吉はナマコの大群に遭遇をした場所は誰れにも教えない。海に潜ることに、そのあたりにそつと近づいてみるが、その後一度もナマコらしい気配はない。あの年以来、ナマコが海の底から急に姿を消した。大勢の仲間も、最近ナマコが捕れなくなったと歎息している。けれども真吉だけは、そのうちにきつと又見つけてやる、と心に期するものを持っている。

「真吉よーッ」

と、遠くで呼ぶ声が出た。

真吉は海に潜るとき耳栓をしていなかった。耳栓なしで十でも十五でも潜った。たまに、ツーンと耳の奥で水の音がして、頭がくらくつとすることもあったが、浮上して、鼻をつまんで力一杯息を吹くと耳の奥から温い水が流れ出て直ぐに治った。

真吉は人間の先祖は猿ではなく、魚であったに違いないと信じている。耳栓をしていないから海の底にはいろいろな音が伝って来る。一番よく伝わるのは船の音であった。音によって、今戻ったのは誰の持ち船であるのかよく判った。漁船の場合、大漁なのか荷薄なのかの見当もつく。時折り得体の知れぬ音のすることがある。遠くから、下肚にずしんと響く暗く巨きな音が津波のように伝ってくるがあった。音というより鳴動だった。真吉を息子のように可愛がってくれる昇太とつあんは、海底噴火が爆発の前兆ではないか、と

真顔で気色悪がっている。昔は、こんな音はしなかった、と云っている。

「真吉よーッ」

潜ろうとして灰色の冷たい空気を吸ったとき、陸から声を合せて呼ぶのが、今度ははっきり伝った。

波が少しあった。

水を蹴って水中から伸び上がるようにして陸を見ると、男が二人両腕をふって大型の手招きをしていた。

真吉は抜き手を切って陸に向った。今日は仕事ではなかったから、桶も水中鉄砲もなく、腰に鉛の帯も巻いていなかった。

身軽であった。

陸に戻ると、

「お前、今、黒い大きな魚が跳ねてるみたいだったぞォ」

と石河原の上に仁王立ちした大柄の男が感心したように云って頭をふった。

真吉は少し小柄ではあったが、ゴムの黒いウェット・スーツがぴちっと軀を締めつけて、スマートだった。真吉は黒い大きな魚みたい、といわれていい気色になっていた。

「お前、警察に行つて来いや」

と、もう一人の年嵩の方が沖を見ながら云った。穏やかな口調であったが、変に力のこ

もった響きがあった。

遠い沖には半島の山々が蒼く光ってみえた。

春の色だった。つい先日まで雪を被っていたものだった。

「おれ、何も悪いことしてないじゃ」

真吉は精一杯肩を聳やかし、口を尖らせて波打ち際から二人を睨んだ。真吉は小柄ではあったが滅法気が強く、身動きも敏捷で喧嘩早かった。年長者にも容赦しなかった。

急に陽が翳り、海が黒くなった。

海面に風が走り、小さな縞模様をあちこちに作って廻った。

「おお、寒む」

と、年嵩が身を震わせて真吉に引き上げを促した。

「質屋に來い」

と大柄が顎をしゃくった。

「おれ、警察は好かんぞッ」

真吉は二人に又云った。

二人は顔見合せて大声で嗤った。

大柄は腕に彫りかけて途中止めの汚い入れ墨のあるばくち打ちで、若い頃から何遍も警察の厄介になっている。今はもぐり仲間の古顔のひとりになっている。仲間はタツと呼ん

でいる。年嵩は「潜り組合」の組合長で、真吉の死んだ父親と同年であったが、これも警察を極度に嫌っている。嫌っているというより恐れていると云った方が適切かもしれない。二十年以上も車の無免許運転を続けているからである。警察を恐れているせい、二十年間無事故無違反を続け、一度も挙げられたことがない。浅田さんと仲間は呼んでいる。さん付けの敬語で呼ばれるのは十数名の仲間のうちで只ひとりであった。無精髭がのびると高僧のような風格が漂った。免許が取得出来ないのは、文字の読み書きが苦手であったからである。

「おれ、酒も飲まんぞ」

真吉は又二人に逆った。

質屋というのは裏町に在る小さな酒店のことだった。昔質屋を営んでいたことからそれが屋号のようになっていた。中学校長上りの主人と妻君と娘の三人が交替で店番をしていた。校長上りが店番のときには客が少かったが、娘のときには満員だった。

「お前が、なんぼすばしこくても、摺えて仕舞えばまだおれの方に分があるじエ」
と、タツは真吉の手首を握って波打ち際から小高い石河原に引き上げた。

このあたりの浜は砂場ではなく石の河原だった。波打ち際の石は丸く小さく粒が揃って、それが上になる程大きくなった。河原は急な傾斜になって、大人の背丈程の高さで東西に、鱗のある大蛇のようにくねって伸びていた。海の時化るごとに、大蛇のくねりは変化をみ

せたが、海岸が浸食されることはない。

「もぐり」達は石浜のことを灘河原と呼んだ。灘河原には数軒のウニ小屋が並んで建っていた。小屋とはいっても使用されない季節は屋根もベニヤ壁も強い灘風に剝ぎとられて、殆ど裸の柱だけになっていた。使用されるのは七月のウニの季節が約一ヶ月程だった。

このあたりは海の中も岩場であった。広く巨きな岩場が沖まで続き、昔から魚介類や海草の豊富な海だった。

「わかめは生えていたか」

と、浅田が歩きながら訊いた。もう直ぐ解禁になるので真吉がその下見に潜っていたのだらうと浅田達は考えていた。

「去年に比べて生えが悪い。それに草丈も短い」

と、真吉は一人前に答えた。

解禁を日延べにするか、と浅田がタツをふり返り、日延べなんぞしなくても、採りたい奴には採らしたらええがな、とタツはやけくそ気味に返事した。解禁日は仲間間で決める價しだ。

浅田はいつも酒に酔っぱらったときのような、ふらつくような頼りない歩き方をしている。浅田はウェット・スーツのない頃から海に潜り続けている。三十年も潜り続けているから潜水病にかかっているのではないか、と真吉は思っている。